

日本学術会議

化学委員会・分析化学分科会（第 25 期・第 9 回）

議事録

日時：令和 4 年 3 月 29 日（火）16:00-17:00

場所：オンライン会議

出席者（11 名）： 岡本 裕巳、玉田 薫、栄長 泰明、尾嶋 正治、加藤 昌子（副委員長）、
斎藤 公児、佐藤 縁（幹事）、竹内 孝江（幹事）、谷口 功（委員長）、藤本 俊幸、
宮崎 あかね

欠席者（0 名）

記録：竹内 孝江

配布資料：

資料番号なし 化学委員会分析化学分科会（第 25 期・第 9 回）議事次第

資料 1 前回議事録（分析化学分科会（第 25 期・第 8 回）議事録）

議事

1) 前回分科会の議事録確認について

前回分科会の議事録はメール会議で全委員からすでに承認されており、事務局に提出済みで、学術会議の web サイトに UPLOAD されていることが報告された。

2) カーボンニュートラルについて

谷口委員長から、カーボンニュートラルについての連絡会議及び学術フォーラム（令和 4 年 3 月 13 日(日)開催の学術フォーラム：カーボンニュートラル実現に向けた学術の挑戦 システムの転換を目指して）に連絡会議メンバーとしてリモート参加した際の議論内容についての説明があった。幅広い切り口があるので、各分科会でそれぞれの取り組みを行い議論しながら進めていくこと、現段階では特定の方向に集中した取り組みは行わず議論を深めていくこと、また、ホームページに記載があるので確認してほしいことが述べられた。

3) パンデミックについて

平時および緊急時に対応する、パンデミックと社会に関する連絡会議「平時、緊急時の臨床、疫学、基礎研究の体制」ワーキンググループが結成され、分析化学分科会からは栄長委員が参加。栄長委員から、ワーキングの議論内容について、ワクチンなどが遅

れた理由などを議論していること、ワーキングメンバーは医療系研究者が主体であること、研究者に限らず企業・行政系にもヒアリングしていくこと、日本では許認可手続きの煩雑さのため研究が遅れていること、例えば、日本医学会連合として提言を予定していること、データと個人情報の取り扱いの法整備、機器・試薬の許可の迅速化の法整備が必要であることが紹介された。

4) 「日本学術会議 in 福岡」について

玉田委員から、学術講演会「若手研究者が考える地方創成と学術の未来」が、2月23日に福岡においてが開催され、若者の企画で地方創生と学術の未来について議論したことが報告された。(https://www.scj.go.jp/ja/event/2022/318-s-0223.html)

5) 日本学術会議会員からの情報として

玉田 本部企画がカーボンニュートラルとパンデミックに集中しているので、分科会企画は異なる視点のものについて行うべきではないか。

岡本 学術会議からの意見の表出の枠組みが変更となったこともあり、提言等の表出が止まっている。分科会からの意見は、「見解」としてまとめる方向で進めていくのがよい。カーボンニュートラルの委員会においては、第一部の委員からは技術を度外視して発言がなされており、文系の意見が多くなっているとの報告を受けている。

6) 4月以降の分析化学分科会の進め方についての各委員からの意見

玉田 分析化学ならではのテーマを打ち出すタイミングである。

尾嶋 見解を出すべき。分析化学の深み（極限の分析）を見せる方向を探るのが1つ、もう1つはロボットなど自動化を利用した分析化学を探る。そのようなフォーラムを企画すると興味深い。

加藤 「国際基礎科学年～持続可能な世界の発展のために～」(The International Year of Basics Sciences for Sustainable Development (IYBSSD))に向けた議論をする。24期には、分析化学分科会からは「報告」をまとめて提出したが、これからは分科会レベルで「見解」が出せるので、積極的に検討する。

斎藤 企業の立場から、大型装置施設の有効活用をアピールする。分析化学の有用性をアピールする。

竹内 分析化学データの取り扱いについて学振193委員会で議論しているが、政府の規制や方針などで克服できない問題がある。分析化学の深い理解の視点から、AIで出来るとこととできないこと、そのような視点から「見解」としてまとめる。

藤本 分析化学が重要な要素となる、サーキュラーエコノミーに関する検討も面白いのではないかと。また、複数の分析手法から得られた結果を活用する統合解析は、各分析手法の本質的理解が必要であり、当分科会での検討に値する一つだと思う。更に分析データの3R (repeatability, reproducibility, reliability) に関して、保有するメタデータと言及できる範囲の検討も面白いと思う。

宮崎 学術会議と市民との対話が重要である。新しいやり方を模索する。

佐藤 国際基礎科学年に貢献する。「見解」をできるだけ早く出す。

谷口 分析化学分科会から分析化学の本質について「見解」や「報告」を出す方向で進めるのが良いかと思われる。特に、一般の方々にもご理解が得られるように配慮しながら「見解」等をまとめる方向で進めることを考えたい。

7) 化学委員会企画分科会から案内

岡本委員から、分子研所長招聘会議が、6月7日(火) 13:00 からハイブリッド形式で開催されること、テーマは、「日本の人材育成を考える」であるとの案内があった。

最後に、谷口委員長から、次回の分科会において、フォーラム・シンポジウムの企画を提案できるようにしたいこと、また、次回の分科会は5月または6月に開催予定で後日案内をすることが述べられ、閉会した。

以上